

特240

234



始



特

234

荒木良仙著

真言の源匠弘法大師

眞言の洪匠弘法大師

荒 木 良 仙



私は只今御紹介を蒙りました荒木良仙であります。先月の十七日に六大新報社の榎尾さんから、此の降誕會に出席して講演をせよとの申越でありました。其の申越狀に、高祖大師の事であるから、是非とも承諾をするやうにとの事であつたのです。そこで御引受はしたものの、弘法大師に關しましては、既に毎年催される此の降誕會に於きまして諸方面の先輩學者から御講演が御座いまして、略其の事蹟を顯彰し盡された感があるのであります。私は現今室生山に居りまして修行を致して居る者であります。御承知の如く、室生山は如意寶珠不二の道場と申しまして、眞言宗に於きましては、特殊の地位を有して居る所であります。即ち弘法大師が末徒に對して、己が眼肝を守るが如く、此の御山を守らなければならぬと仰せられた由緒あるお寺であるのです。そうでありますから、無下に此の御來示を拒むことが出來無い。然し、私は、私が室生山の住職であると

いふ事情から離れまして、極めて虚心に、只真言末徒の一人として、茲に弘法大師を鑽仰し參らせたいと思ふのであります。

弘法大師の御遺告の中に、ウ一山土心水師が建立する道場に朔毎に避虵の法を三箇日夜修すべき縁起第二十三といふのがありますが、それを讀んで見ますと、夫れ以れば避虵の法呂は是れ凡の所傳に非ず、金人の秘要なり、阿闍梨の心肝口決なり、東寺代々の大阿闍梨は彼を像想おぼひて法を修せよ、乍ち後夜毎に念誦し畢て護身を爲せ、道肝を精進の峰に籠め、亦本尊海會を彼の岫に安せり云々と記されてあるのであります。そうでありますから、現今、當教王護國寺に於きまして、毎年奉修されるところの後七日御修法に於て、本尊となるころのものは何であるかと言へば、即ち如意寶珠であるのです。此の御遺告に示すところに依りまして、苟も真言の末徒たる者は、必ず後夜念誦法又は南向法と申しまして、毎朝室生山を遙拜せなければならぬことになつて居るのであります。さうでありますから、弘法大師に關する史籍記録には如意寶珠に就いての記述が、諸所に散見されるのでありますが、今、其中で二三の記録を擧げて見ますれば、史籍集覽別記第六十八に、經範さんの編まれた大師行狀集記といふのがあります。其の中に

有る書に曰く、此の寶珠は大唐阿闍梨耶の附屬せらるゝところなり、吾れ戴頂して我が朝に渡り、或る名山勝地に勞籠すること既に畢ぬと記してあります。又續群書類從卷第八百に收めてあるウ一山記にも南閻浮提大日本國大和州宇田郡一勝地有り、彼處を名づけてウ一山となす、又精進峰といふ、彼の山は天下無雙の靈地、日本第一の秘處なり此れは則ち先聖人の定禪窟なり、山に五部峰有り、五智圓滿の表示なり、又南に三股峰有り、是れは三部王殿總持の語密なり、中河に七淵あり、無所不至の體清淨身密なり。今此の山河は五部の秘藏、三密の淵源なり、山に七重あり、高く金輪七寶を顯表す、後に震多尼峰あり、寶珠を彼の峰に埋めらる邊に護摩峯有り、す字の智火中に火生三昧忿努形を現す、河に七淵あり、す字の智水衆生の罪垢を洗除す。彼の兩境の間に鐘銅道具等品々の寶物之れを埋む。此の山に四十九院有り、大師は慈尊院に住し、堅慧は安養院に住す云々と記してありまして、弘法大師には深い因縁を持つて居るところの名山であります。さういふやうな事情に顧み、私は此の降誕會に於て、聊か弘法大師鑽仰の誠意を披瀝して見たいと思ふのであります。

第一に私は弘法大師の立教開宗に就いて申述べたいと思ひます。藤原良房撰の大僧都

空海傳に、弘法大師を稱して密教の宗師と言はれて居ります。其の所謂密教の宗師として、弘法大師はごういふやうな特質を御持ちになつて居るかといふことに就いて申述べて見たいと思ひます。弘法大師が眞言の大義を顯彰するに當つて、其の最も異色あることは、生身の此の身を以て證悟を得られたといふことであります。即ち大覺の位に登られたといふことであるのです。其の行き方は頗る釋尊の成道に似通ふて居るのであります。史實に就いて申しませうならば、釋尊も、大師も共に人の子としてお生れになり、佛果を成滿せられたのでありますが、さうならば、大師の修學の方途はごういふ風であつたかと思ひますれば、其の結果から見れば、佛果を成滿するといふことの目的が第一には自己の完成であり、第二には國家民生の爲であつたのです。弘法大師傳に就きましましては數十種の、否數百種とも申上げられるでせう、何としても澤山の書物が出て居る、又弘法大師の御傳記をうかゞふ史籍としては、それこそ數千種、數萬種を數ふるこゝが出来るのであります。私は今お大師様の御傳記の大體を知る爲に、弘法大師の事が我が國史にはごう出て居るかといふことに就いて申述べたいと思ひます。

扶桑略記拔萃の二に、十年、即ち延暦十年であります、空海和尚俗典を讀むと雖も、

志は佛經を専らとす、石淵贈僧正諱は勤操に逢ふて虚空藏求聞持能滿所願等法を受學し入心念持すと出て居ります。是れが弘法大師年譜や、東寺長者補任其の他に弘法大師十五歳の御時に、外舅阿刀氏に隨つて京に上り、石淵勤操に隨つて大虚空藏並に能滿虚空藏法等の法を受くと出て居る其の事を指したものであります。私は今主として國史に載するところに依りまして、大師傳をうかゞつて見やうと思ふのでありますが、大師の正傳として此等に關する記述をどう見るのが正當であるかといふことに就きましては、私共目下其の事の調査に従事して居るのであります。隨つて他日愚見を申上げる機會もあらうと思ひますから、今日は之れを申述べませぬ、而して扶桑略記には更に筆を進めて出家して漸く避世の志を企て、山林に苦練し、或は阿波の大瀧に躋り、勤修の間、大劍飛び來つて菩薩の靈應を標す。或は土佐室戸に到り、觀念の時明星口に入つて佛力の奇異を現す、則ち嚴冬の深雪には藤衣を被て精進の道を顯はし、炎夏の極熱には穀漿を斷ちて朝暮懺悔すと出て居ります。弘法大師が、後年、自然と一體になられて、深山幽谷の境地に勤修觀念の行に耽るやうなことが出来たのは、全く此の年少の頃に苦修練行された結果であらうと察せられるのであります。彼の佛祖統紀に於ける入唐修學の記

事や、塵添溢囊鈔に於ける弘法大師が不空三藏の後身であるといふことに就いての記述即ち不空三藏が入滅されたのが唐の太暦九年六月十五日、而して弘法大師の誕生が日本の寶龜五年六月十五日、即ち本日であります。そういふ因縁から弘法大師は不空三藏の後身であると言はれるのでありますが、夫等の記述、又參考源平盛衰記の懷胎に就いての靈奇、生後の瑞相等に關する事などは、從來世に出た弘法大師傳に詳しく記してあるのです。大聖人の生誕、修學に關しましては、尋常人に見ることの出來無い卓越せる點をうかゞふことが出来るのであります。弘法大師の御師匠様であらせられる勤操僧正が後年お大師様を唐へ留學させるに就いて上表せられたことがありますが、其の中にも、右十四年登戒壇の僧空海、諸佛の指授を受けて、温ぬるところの經大和國久米の道場に在り、善無畏三藏の游沚に得たり、彼の三藏の識に曰く、此の地大機未だ熟せず、經を止めて時を待つ、弘法利生の菩薩有りて來つて此の經を恢めん云々と述べられまして、寧馨兒と申しませうか、麒麟兒と申しませうか、他日龍雲の機會を得て眞言密教の修行に入られ、即身成佛の大義を唱道せられたのは、勤操僧正の其の上表の中に、今、國家此の靈を産せり云々と述べてありますが、全く其の通りでありまして、大聖人の今日の誕生

こそ誠に國家民生に取つて一大幸福であると申さなければならぬのであります。

弘法大師は二十歳の御時に、勤操僧正に隨つて和泉國槇尾山寺で剃度し、沙彌十戒七十二威儀の戒を受け、二十二歳の御時には東大寺戒壇院に於きまして具足戒を受け、戒行を積まれたのであります。尋常平凡の徒でありまして、斯る場合には道念の健固を期するやうになるものであります。況して吾が弘法大師に於きましては、斯くして戒法の任持に精進せらるゝのは、固より言ふ迄も無いことであります。更に延暦十五年御年二十三歳の時には、佛前に誓願を發して不二の大法を尋求し、久米道場東塔下に於て大毘盧遮那經を感得せられたのであります。之れが、後年、入唐求法の大願を立てられ、眞言密教を我が日本に流傳せらるゝに至つた機縁を爲したのであります。即ち弘法大師は延暦二十三年五月十三日、遣唐大使藤原葛野麻呂等と第一船に乗りまして、入唐の途に上られたのであります。弘法大師年譜に依りますれば、同年七月六日遣唐使船四隻が、肥前國松浦郡田浦を發したのでありますが、後、卒に風濤に遭ひまして漂蕩した末に、翌八月十日、其の第一船が福州長溪縣赤岩鎮已南の海口に到着したのであります。ところが、一行の上陸に就きまして、手續が工合能く運びませんので、頗る困惑したの

であります。偶々閩濟美が福州刺史として新任せられましたから、遣唐大使は事情を婁陳して上陸を許さるゝやう願ふたのでありますが、閩刺史も容易に之れを許さない。そこで、弘法大師は大使に代つて書を裁し、新州司に呈したのであります。斯くして初めて上陸を許されたのであります。弘法大師は同年十一月三日、遣唐大使の一行と共に福州を發しまして、長安行の途に上り、翌十二月二十三日、目的の地に着きまして、官宅に寓したのであります。又、翌延暦二十四年には橘逸勢と共に西明寺永忠和尚の故院に居りまして、研學の策を運らされたのでありますが、愈其の年六月上旬には、青龍寺の惠果和上に就いて學法灌頂壇に入ることが出来まして、大悲胎藏大曼荼羅中臺大日如來投華得佛の瑞祥を得られたのであります。又七月上旬には、同じく金剛界大曼荼羅に臨んで、毘盧遮那如來に投華し、得佛の嘉瑞を見ましたものでありますから、惠果和尚は頗る驚喜せられたのであります。又八月上旬には、傳法阿闍梨位灌頂を受けまして、大祖法身第八の師位を紹がれたのであります。此の事が付法傳には、今、日本の沙門空海と云ふ人有り、來つて聖教を求むるに兩部の秘奧壇儀印契を以てす、漢梵差ふこと無く悉く心に受くること猶ほ瀉瓶の如しと認めてありまして、其の受法の様子が、誠に肝膽

相照の有様を想見せしむるものがあつたのです。又惠果和尚が、弘法大師の受法を喜ばれたことは、お大師様の書かれた御請來目錄中に、空海西明寺の志明談勝法師等五六人と同じく往いて和尚に見ゆ、和尚乍ちに見て笑を含み、喜歡して曰く、我れ先きより汝が來るとを知つて相待つこと久し、今日相見ること大に好しく、報命謁なんと欲するに、付法に人無し、必ず須らく速に香花を辨じて灌頂壇に入るべし云々と認められてあることに依つても知ることが出来やうと思ひます。而も惠果和上は弘法大師に阿闍梨位灌頂を授けた其の年の十二月十五日に、六十歳を以て入寂されたのでありますから、此の灌頂こそは弘法大師に取つて非常に幸な機會を與へたものであると申さなければなりません。先年、常盤大定博士が青龍寺の事に就きまして論文を發表されて居りますが、其の中に唐の永貞元年十二月に、惠果和尚は春秋六十にして入寂したのであるから、大師と惠果との關係は實に旨龜浮木の奇縁と謂つてもよい。僅に半歳の師資は實に東洋の文化に取つて千歳の一遇であつたので、若しこの半歳を後れたならば、日本佛教史は非常に異つたものとなつたらう。特に大師によつて大に名を後世に遺した惠果は、若し此半歳の好機を逸したならば、或は歴史以外に埋没せる人となつたかも知れない。日本に

來つて大師に依つて初めて組織を得た密教は、若しこの半歳を失つたならば、或は特有の位置を佛教學に要求するまでのものとならなにかも知れぬと言はれて居りまするが全く其の通りでありまして、此の好縁こそは日本の眞言に取つて誠に幸を齎したものであると申さなければなりません。私が先年豊山大學に職を奉じて居りました際、同大學に學んで居られた和田辨瑞君は、今から六年前に態々彼の地へ行つて青龍寺址を調査し其の靈地を參拜して歸つたのでありますが、其の際、將來致しました寫真等は、青龍寺遺址を調査する上に、頗る有益の材料となつて居るのであります。何と致しましても、弘法大師の入唐留學が齎したところの日本に於ける眞言密教の流傳は、我が邦文化の向上に就きまして重大な結果を齎することとなるのであります。彼の大同二年四月二十九日の、大師の爲めに筑紫の觀世音寺に下さるゝ官符の牒中にも、入唐廻來學問僧空海、右件の僧、笈を遠藩に負ひ大道に耽嗜す、空しく往いて満ちて歸れり、優學稱すべし云々と認められました、弘法大師留學のことを賞揚されて居る。さうならば、お大師さまはごういふやうなものを相承して歸られたかといふに、弘法大師の、新請來の經等の目錄を上つる表といふものがありますが、それを讀んで見ますると、入壇灌頂して兩部の大

法を學び、諸尊の瑜伽を習ひ得た喜を述べられて居る、而して其の御請來目錄には、阿闍梨付囑物として、佛舍利八十粒、刻白檀佛菩薩金剛等像一龕、白縹大曼荼羅尊四百四十七尊、白縹金剛界三昧耶曼荼羅尊一百二十尊、五寶三昧耶金剛一口、金剛鉢子一具二口、牙床子一口、白螺貝一口等の金剛智三藏から次第に相承し來つたところの付囑物の外、惠果阿闍梨所持の健陀穀子袈裟一領、碧瑠璃供養鏡二口、琥珀供養鏡一口、白瑠璃供養椀一口、紺瑠璃箸一具等を付囑せられたのであります。弘法大師は教法を受學し、入壇灌頂をせられた外、密教所學に必要な梵字梵讚を學ばれたのであります。惠果阿闍梨の申さるゝには、眞言秘藏は、經疏に隱密にしてあるから、圖書を假らなければ相傳することは出來無い、ほんとうに眞言法を傳へんとするには、其の方法を取らなければならぬといふので、惠果和尚は供奉丹青の李眞等十餘人を喚びまして胎藏金剛界等大曼陀羅等十鋪を描かしたのであります。其の上二十餘人の寫經生を集めまして、金剛頂等の最上乘密藏經を書寫せしめた外、供奉鑄博士趙吳を喚びまして、十五種の道具を新造し、之れを付囑して告げらるゝには、汝は誠に密教任持の器である、大に努力せなければならぬぞよ、我が數多い弟子の中で、或は一部の大法を學び、或は一尊一契を得

た者はあるが、而も兩部の大法、秘密の印契悉くを傳受し得た者は汝一人である。ワシは既に此の土の縁が盡きて久しく生きることは出来ない。就ては兩部大曼荼羅、一百餘部の金剛乘の法及三藏轉付の物並に供養の道具等を持ち歸つて國家に奉獻し、眞言密教を天下に流布して天下民生の幸福を増すことに勉めよ、さうすれば四海泰平にして萬民豊に樂むことが出来る、是れ誠に佛恩を報じ、師徳に酬ゆる所以であつて、國には忠、家には孝であると、鎮護國家の要道を遺誠せられたのであります。弘法大師が此の遺誠を守りまして、無二の大法を我が國に將來する切なる御心持に至りましては、他の御請來目錄、即ち大同元年十月廿二日上表の文の中に、今則ち一百餘部の金剛乘教、兩部の大曼荼羅海會請來して見到せり、波濤漢に洩き、風雨舶を漂はすといふと雖も、彼の鯨海を越えて平かに聖境に達す、是れ則ち聖力の能くするところなり云々と述べられて居るところに依りましても知ることが出来やうと思ひます。此の御請來目錄に依つて見ますと、弘法大師が請來した經律論疏章傳記其他のものは新譯等の經都て一百四十二部四十七卷、梵字眞言讚等都て四十二部四十四卷、論疏章等都て三十二部一百七十卷即ち二百十六部四百六十一卷外に佛菩薩金剛天等像、法曼陀羅、三昧耶曼陀羅並に道具九種

阿闍梨付囑物十三種であります。之れを弘仁十四年十月十日奉進致しました眞言宗所學經律論目錄の金剛頂宗經、胎藏宗經、雜部眞言經等の經二百卷、梵字眞言讚等の四十卷蘇悉地經の三卷、蘇婆呼經二卷、金剛頂受三昧耶佛戒儀一卷、其の他有部、薩婆多部等の經頌等律一百七十三卷、金剛頂發菩提心論一卷、釋摩訶衍論十卷に對比して見ますると、其の間取捨整理せられた跡が見られるのであります。斯ういふやうな密教興隆の事業が、總て國家を本として行はれたものであることは、弘法大師の十住心論の中にも、天の恩詔を奉はつて秘義を述べ、群眠の自心に迷へるを驚覺して、平等に本四曼入我我入の莊嚴の徳を顯證せしめんと述べられて居るところに依りまして、如何に、弘法大師が尊皇愛民の思想に富み、此の根本の考に立出して、教法を流布せられたものであるといふことが知り得られるのであります。般若心經秘鍵のあの有名な末尾の文、即ち時に弘仁九年の春天下大疫す、爰に帝皇自ら黄金を筆端に染め、紺紙を爪掌に握つて、般若心經一卷を書寫し奉り玉ふ、予講讀の撰に範つて經旨の宗を綴る、未だ結願の詞を吐かざるに蘇生の族ら途に予む、夜變じて日光赫々たり、是れ愚身が戒徳に非ず金輪御信力の爲す所なり云云といふ文を拜讀致しましても、天恩を奉戴して正法の流通を計らう

とする大師の思召を知ることが出来るのであります。又尊皇の思想がどう顯はれて居るかといふことに就きましては、性靈集第九に、弘仁七年十月十四日の上表が載せてありますが、其の中にこういふのがあります。沙門空海言す、伏して聖體の乖躒を承はつて心神主無し、即ち諸の弟子の僧等と法に依つて一七日夜を結期し、今月八日より今朝に至るまで、一七日畢へなんと欲す、持誦の聲響き間絶せず、護摩の火煙晝夜を接す、以て神護を佛陀に仰ぎ、平損を天躬に祈請す、感應未だ審にせず、己を尅めて肝を爛らす伏して乞ふ體察し玉へ、謹て神水一瓶を加持して且つ弟子の沙彌眞朗を勅して奉進せしむ、願くは以て藥石に添へて不祥を除却し玉へ云々と述べられて居る。此の御文章を拜讀致しますれば、弘法大師が如何に尊皇の念慮に富まれて居るかといふことがわかるのであります。又平城天皇灌頂文などにも、某乙幸に昌泰に逢ふて求法を叨濫す、厚く聖朝霽霈の澤に沐し、大師慈悲の力に頼て、去んし大唐の貞元二十二年日本の延暦二十四年の六月十三日を以て、長安城青龍寺東塔院の灌頂道場に於て、諸佛の三昧耶戒を受持し五部の灌頂を授かり、兩部の曼荼を荷ひ一百餘部の金剛一乘教を負ふ、蜚命を長途に忘れ、泡身を驚波に捐て、國恩に酬ひ奉らんが爲に本朝に還歸す、幸に諸佛の應化金輪運

啓の朝に遇ひ上つて、大同元年を以て新曼荼羅并に經等を奉る、爾しより己還、愚忠感無くして忽に一十七年を経たり、天、人の欲に従ひ、聖、人の心を鑒み玉ふ、因縁感應の故に、今日龍顏に對し奉つて愚誠を遂ぐることを得たり、一たびは喜び、一たびは懼れて心神厝無し、伏して惟みれば太上金輪皇帝陛下云々と述べられてありますが、此の御文章を讀んで見ますと、如何にも尊皇の至情が横溢して居るのをうかゞふことが出来るのでありませう。

又弘法大師が如何なる論疏を述作し、密軌次第を立てられたかといふことは、眞言宗の餘教と異つて居る點を知る上に、重點を爲すものであります。夫等に關しましては、今日は申し述べませぬ。只眞言宗所立の意義即ち弘法大師が、特に我が日本國、日本國民を拯濟する爲に立てられたところの教、夫れは十住心論の中に、秘密に約するに大小有り、眞言にも亦大小有り、故に菩提場經に云く、我をば眞言と名づけ亦大眞言と名づくと、初に眞言とは應化身所説の眞言なり、次に大眞言とは究竟法身所説の眞言なり、問ふ、眞言と大眞言と何んか別なる。答ふ、譬へば大乘と小乗との如し、若し淺略門に就いて説かば淺深不同なり、云何んが不同なる、且く初の阿字に就いて釋せば、世

天乃至如來所説の眞言に皆阿字有り、是れ阿字本不生の義なり、此の不生に於て無量の不生有り云々と述べられまして法身所説の大義を力説せられて居るのであります。又即身成佛義に於ては、眞言者圓壇を先づ自體に置き、是より臍に至るまで大金剛輪を成じ是れより心に至るまで當に水輪を思惟すべし、水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪ありといふ偈頌に續いて、謂く金剛輪とは阿字なり、阿字は即ち地なり、水火風は文の如く知ぬべし、圓壇とは空なり、眞言とは心大なり云々と釋しまして、六大の所成に就いて大師の卓越せる思想を表明せられて居ります。又彼の秘藏寶鑰の中には眞言密教法身説者、此一句は眞言の教主を顯す、極無自性以外の七つの教は皆是れ他受用應化佛の所説なり、眞言密教兩部の秘藏は、是れ法身大毘盧遮那如來自眷屬の四種法身と金剛法界宮及び眞言宮殿等に住して、自受法樂の故に演説し玉ふ所なり、十八會の指揮等に其の文分明なれば更に誠證を引かず、秘密最勝眞とは、此の一句は眞言乘教の諸乘に起えて究竟眞實なることを示す云々と述べられて居ります。此の文を拜讀致しますれば、如何に眞言乘が諸教に超過して居るものであるといふことを、高調せられた其の思召を知ることが出來やうと思ひます。尙ほ弘法大師が衆藝を綜べられたことに就いて少しく御話を

申したいと思ひます。お大師様が名筆であらせられたといふことは周知の事でありすが、其の事に就いて尊い面白い話が傳へられてあります。或る時嵯峨天皇が、大唐に於ける名筆の書を見よと大師に示されましたのでありますが、お大師様が之れを拜見致しますると、豈に計らんや、前かど御自身お書きになつたものでありますから、此の手跡は以前私が書いたものでありますと申し上げましたところ、嵯峨天皇の申さるゝには、あゝさうであつたか、然し日本に在つては、なせ斯のやうに書かないのであるかどのお尋ねであつたのです、そこで弘法大師は御答へ申し上げまして言はるゝには、日本で斯ういふ風を書くのは相應致しませぬ、夫が爲に私の書風が異つて居るのでありますと申し上げたといふことが兼載雜談といふ書物に出て居ります。そのやうに大師は書道に秀で、居られたのであります。如何に弘法大師が書に親まれたかといふことは、弘仁七年八月十五日の上表中に、五彩の吳の綾、錦の縁の五尺の屏風四帖に古今詩人の秀句を書くやうにどの上意を承はつた時に、斯う述べられて居ります。何に況や、空海耳に其の義を聞いて心に理を存せず、空しく筆墨を費して悉く珍屏を汚す、一たびは悚き、一たびは懼れて心魂飛越す、時に堯曦光を流して葵葎自ら感ず、山に對して管を握るに物に觸れ

て興有り、自然の應、覺えずして吟咏す、輒ち十韻を抽んで、敢て後へに書す、伏して乞ふ天慈其の罪過を宥し玉へ幸甚々々と述べられて居ります。之れを見ても、大師が如何に書道に達して居られたかといふことが知れるのであります。又大師が眞言の行者として書道をどう見て居られたかといふことは、高野雜筆集や、文筆眼心抄、執筆法、使筆法といふやうなものなどを繙いて見ますと、其のお心持を知ることが出来やうと思はれます。高野雜筆集を讀んで見ますと、弘法大師が高野山に入られてからは、寸陰是れ競うて心佛を攝觀せられて居る爲に、臨池に屑うせないといふやうなことが認められてあります、而も後世に残された大師の書は、悉く皆立派なものであつて、卓越せる技能に、瞠目せしめらるゝものゝみであるのです、又其の御文章に至りましては、是れ亦堂々たるものでありまして、本場の支那人さへ驚くといふ程のものであります。然し其斯くの如く顯はれるのは、全く大師の天稟の文才に依るのであります。大師は御承知の用意の周到なることが此所に至らしめるものであらうと思はれます。大師は御承知の如く、文鏡秘府論を舛して文の如何に注意を拂はなければならぬものであるかといふことを述べられ、其の組み立、語勢の屈伸擱縱等を論じ、又病弊を述べて文筆六失、定位

四失といふやうなことを擧げて居られます。大師の心を以てすれば、文筆眼心抄の中にも御述べになつて居るやうに、それは全く禪觀の餘暇である、禪觀の餘暇であられるけれども、其の技能は斯道専門家を凌ぐの域に迄達せられて居つたのであります。私は又之れを修辭學とも見やうと思ふのでありますが、同じく文筆眼心抄の中に山林日月風景を歌詠するにはどういふ心持で行くか、文章の作興はどういふ心に發するか、詩は如何にして作るかといふやうな事に關しまして、今日のレトリックに述べてあるやうな文の體裁、構想に就いて記されてあるのであります。彼の聳聳指揮の如きも亦斯くいふ方面からの興味を以て讀むことが出来るのであります。執筆法、使筆法などには筆の握り方指の力の入れ方等に就きまして親切に教へて居るのであります、而して又、弘法大師が建築、彫刻にどのやうに勝れた技能を持つて居られたかといふことに就きましては、既に天沼博士や其の他の方々から、此の降誕會に於きまして詳しく述べられて居りますから、今日は之を申し述べませぬ。然し、現今に於ける専門大家が、喩へば工業の方面に於て、農業の方面に於て、弘法大師の事蹟を賞揚して居ることは、即ち法學士河田嗣郎氏、法學士岡本一郎氏共著の史的研究日本の經濟と佛教といふ書物などには、經濟方面

から見た工業農業に關する弘法大師の偉績を述べられて居るのであります。現今私の住して居ります大和室生山に於きましては、山容、水態、伽藍配置、佛像の尊嚴といふやうな點が靈域として誠に結構に布置されて居るのであります。同山では、お大師様に因縁の深い、あの三寶鳥、お大師様が閑林に獨坐す草堂の曉、三寶の聲一鳥に聞く、一鳥聲有り人心有り、聲心雲水俱に了々といふ詩を詠まれた三寶鳥が、宵の空に、曉かけて鳴いて居るのであります。又境内の一部を爲して居るところの羊齒類の群落が近頃天然記念物として指定されましたが、さういふやうな施設、施設と申しますのは語弊がありませうが、自然のとりなしが、誠に結構に出來て居るのであります。斯くの如く宗教文學、美術、工藝、自然科學、如何なる方面から見ましても、弘法大師の功業は實に偉大なるものであるのであります。

次に大師の事業はごういふ形を以て顯はれたかといふことに就いて述べたいと思ひます。第一は人類救済に就ての素志を實現するといふことであります。第二は密教の相承に就て惠果和尚の依囑を果遂するといふことであります。第三は大師の愛國思想の流露であります。之れが爲に興法興學の方途を立てまして尊皇の精神を發揚し、民庶の康寧

を期して諸種の施設をなされたのであります。尊皇愛國の思想が如何に顯はれて居るかといふことは彼の宮中眞言院に於ける後七日御修法の奉修に依つても知ることが出来るのであります。即ち宮中眞言院正月御修法の奏狀を拜讀致して見ますと、秘密趣に説くところに隨つて、一七日の間解法の僧十四人、沙彌十四人を擇び、別に一室を莊嚴して諸尊の像を陳列し供具を奠布して眞言を持誦せしめるところの大法であります。斯くすれば顯密の二趣、如來の本意に叶ひまして、現當の福聚、諸尊の悲願を獲ることが出来るといふのであります。是れ誠に上、皇室より、下、萬生に及んで、如來の大悲を加被せしめんとする大法の行事であるのです。其の心は弘法大師の撰述されました般若心經秘鍵にも、民生に對する大愛の思想を瀧がれまして、哀れなるかなく長眠の子、苦しいかな、痛いかな狂醉の人、痛狂は醉はざるを笑ひ、酷睡は覺者を嘲る、曾て醫王の藥を訪らはずんば、何れの時にか大日の光を見ん云々と述べられました人類に對する愛憐の情を瀧がれて居るのです。此の根本のお考が、即ちいろは歌の製作ともなり、綜藝種智院の設立ともなり、講經の會座ともなり、佛像の彫刻、描寫、堂塔の建立、修補ともなり、灌頂の修行ともなつたのであります。いろは歌が我が國文化の發達に關して如

何に有要簡易の文字であつたかは今更贅する迄もありません。又綜藝種智院の設立が民庶の智徳を増進するに就いて緊要の機關であることは其の式文に、今是れ華城一大學有り、閭塾有る無し、是の故に貧賤の子弟津を問ふに所無し、遠方好事、往還疲れ多し、今此の一院を建て普ねく腫脹を濟ふといふお考の下に、此の學校を建てられたものであります。既に人類を救拯するといふお考から種々の企を興されたものでありますから、眞言宗の法資を養成する度者のことに就きましたは、一層心を勞された跡が伺はれるのであります、彼の承和二年正月二十二日官符の、金剛頂瑜伽經業僧一人、大毘盧遮那成佛經業僧一人、聲明業僧一人を度すべき定を拜讀致しますならば、如何に正法を任持すべき密教行者の養成に力を盡されたかといふことが知れやうと思ふのであります。

次に眞言密教の道場建立に就いて申述べやうと思ひます。弘法大師は眞言密教を興隆せんが爲に幾多の寺院を經營されて居るのであります。彼の歸朝後間も無く創建された博多に於ける東長密寺の如き、又は河州高貴寺の如き、東大寺南院の如き、高雄の神護寺の説き、京都府下の乙訓寺の如き其の他澤山ありまするが、當教主護國寺、高野山金剛峰寺は、就中大師の精神を打ち込まれて造立經營された主要の寺院であります。

然らば其の經營が、どんな工合であつたかと申しませうならば、先づ東寺の事に就いて申し上げて見ませう。弘法大師の御認めになりました御文章の中に、東寺の塔を造り奉る材木を曳き運ぶ勸進の表といふものがあります。此の表を讀んで見ますと、塔心材、幢材、幢柱材等、二十四材を曳くに就いて、夫れ々々夫役を割り當て、ありまするが、其の割り當方を見ますと、左近衛府左馬寮、右近衛府右馬寮、左兵衛府、右兵衛府、太政官、中務省、式部省、兵部省、大藏省、刑部省、宮内省、彈正尹親王、式部卿親王、前彈正尹親王、常陸守親王、前律師親王、上總守親王、上野守親王、左京職、右京職、木工寮、東市司、西市司、山城國、村院等の人々が皆此の淨業に従事することになつて居ります。斯ういふ夫役を當てるといふことは、弘法大師の御考のあるところに依つて見れば、單に勞役に服せしめるといふことではなくして、三寶の興隆を計つて功徳を積聚するといふことにあつたのです。さうですから此の事を行ふに就いて、弘法大師は先づ造塔の功徳を述べ、且つ東寺造建の由來に就いて記されてあるのです。其事は拾遺雜集中に東寺大札の銘といふものがありますが、其の銘にも、東寺は是れ密教相應の勝地馬臺鎮護の眼目なり、歸して敬せば王化照明、華夷大平ならん、怠て崇めずんば朝に妖

害有り、國に災亂有らん、天下大亂有る可くんば、東寺先づ荒廢すべし云々と述べられてありますやうに、東寺と國家とは極めて密接の關係を持つて居つたものであります。さうでありますから嵯峨天皇が弘仁三年十一月廿七日、聖田若干を東寺へ施入せらるゝに當りましたも、先帝、皇后、贈四品布施内親王等の成等正覺を期し、兼て聖朝實壽安穩延長、一切所願皆使満足、令法久住拔濟群生、天下人民快樂增益、一切有情共成佛道の爲に此の淨業を行ふものであると仰せられて居るのであります。随つて弘仁十四年十月十日には定額僧五十口を東寺に置かるゝ官符を賜はつて、眞言宗根本の經論律疏を學習すべきことを定められたのであります。これ何が故であるかと申しますれば、同年十二月二日の官符に依つて見ますれば、斯う述べてあるのです、海公杯に乗じて道を行ひ、秘密の眞言を傳ふ、錫を杖き安禪として神呪の妙力を持す、又夫れ東寺は遷都の始、國家を鎮護せんが爲に柏原先朝の建つるところなり、乞ふ此の狀を察して僧徒等を率ひて眞教を讚揚し、禍を轉じ福を修め國家を鎮護せんといへり云々と出て居ります。又天長元年六月六日には造東寺別當に補せられ、翌二年四月八日には、東寺に於ける毎年の安居に、守護經を講せしめて、消禍修福即ち禍を消して福を修め、雨を降らしめ、風を止め

穀物を饒益して邦家を擁護するところの法儀を執り行はしめられて居る。此等の事蹟を考察して見るならば、皇室に於かせられて、如何に東寺を重く見て居られたかといふことが知れやうと思ひます。而して弘法大師は、承和二年正月六日に上奏致しまして、東寺定額僧五十人の供料を定め置かれんことを願ふて居ります、其の官符を見ますと、堂舎は己に建つたが、修講即ち法を修すところの行、經を講ずる勤めが始められて居ない。かういふ風ではいけないから、官家功德料の封一千戸の内二百戸を割いて僧供に宛てられるやう願ふたのであります。當時に於きましては、寺院に對する供料はきちんと極りよく定めてありまして、佛供に充つるもの、僧供に充つるもの、雜用に充つるもの等、截然區別が立つて居つたのであります。さうでありますから、弘法大師御入定後に於ける東寺經營の狀態を見ましても、承和四年四月五日には、初て東寺へ補任致しました定額僧名の僧綱牒が下されてありますし、承和七年十二月五日には、東寺少別當を定め置かれた官符が下されてある。又承和十一年六月十一日には、東寺結縁灌頂の燈油料を給すべき官符が下されてありますし、同年九月十一日には東寺灌頂料調布三十端を給すべき官符が下されてあります。其の他寛平九年六月二十九日の東寺に於ける試學

問の官符、延喜七年七月四日の東寺專屬の度者に關する官符等を讀んで見ますと、如何に東寺を重く見て居つたかといふことが知れるのであります、而も今日の東寺は、或る點から見ますれば、弘法大師が此の寺を創建せられましたお考以上に、其の實質を充實し、寺院としての働きを示されて居るやうに見られるのであります、これは誠に結構のことでありまして、此の寺を主體として、法儀の修行、夫は弘法大師御影供の奉修を初めとして、年中に於ける諸種の法要、法會は勿論のこと、伽藍の興隆に、教育事業に、社會事業に、その他諸般の施設が完備されて居るのであります、明治以來毎年こゝで後七日御修法が奉修されて來たことも、誠に東寺創立の由來に考へまして、結構のことに存せられるのであります。私は吾が同門の諸師が、深く大師の思召を體して、益々密教の興隆に努力せられんことを冀ふものであります。

次に、私は、高野山のことに就きまして一言致したいと思ひます。弘法大師が、高野山の經營、又高野山を穩棲の場所とせらるゝお考に就きましては、誠に眞劍味の溢れた申し上げる迄も無く、弘法大師の御事業は、何れも全心全力を打ち込まれないものは無いのであります、ごこにも密教修行者としての面目が、誠に能く顯はれて居るので

あります。即ち弘法大師は金剛峯寺を建立するに當つて先づ百二十社、十二の伽藍四神及び日本朝中の千餘社乃至地等の六大神等を勸請されました、鎮國安民の爲に除災秘密の道場を建立する礎地を築かれたのであります。其の啓白文を拜讀致しますれば、斯ういふものゝ章句の間にも、弘法大師の世界觀、人生觀とも見るべきものがうかゞはれるのであります。十住心論、即身成佛義其他六大所成の思想を高調された其の根本のお考が、終始一貫して、天地の間に、自己が群生と生を共にし、生々育々の事にたづさはつて居るといふ深い思召がうかゞはれるのであります。而して其の事は、弘法大師の雜文の中に、貧道少年の日修涉の次で、吉野山を見て南に行くこと一日、更に西に向つて去ること二日程にして一の平原有り、名づけて高野と曰ふ、計るに紀伊國伊都郡の南に當れり、四面高山にして人迹覓に絶えたり、彼の地修禪の院を置くに宜し、今思はく本誓を遂げんが爲に、聊か一の草堂を造つて禪法を學習する弟子等をして、法に依つて修行せしめん、但恐らくは山河土地は國主の有なり云々と述べられました、高野山が修禪の場所として誠に結構であるから、之を賜はつて、一の修行道場を設けたい。なせかといふに、弘法大師に取りましては、密教の弘布宣傳に就いて一の心願があるのです。其の

心願を知る爲に、大師の御文章を拜讀して見ませう。其御文章の中には斯う出て居ります。空海、大唐より還る時、數々漂蕩に遇うて聊か一の少願を發す、歸朝の日必ず諸天の威光を増益し、國界を擁護し、衆生を利濟せんが爲に一の禪院を建立し、法に依つて修行せん、願はくは善神護念して早く本岸に達せしめよと。弘法大師は、唐から御還りの時に猛烈な風濤の難に遇はれた、そこで、お大師様は立願せられて歸朝の後には、國界を擁護し、衆生を利濟しやうとするのであるから、どうぞ諸善神吾れを護念して、早く本岸に達せしめられよと懇請せられたのであります。斯くして大師は神明の加護を得海路平隱に歸朝することが出来たのであります。そこで其の加護に酬ゆる爲に、高野山を開かうとするのであります。この事は他の雜筆にも、今、法に依つて修禪の一院を建立せんと思ふ、彼の國高野の原尤も教旨に允へりと述べてあります。總て弘法大師の山を開き、土地を平かにして寺を立てられるのは、經軌に示すところに基いて行はれるのであります。一説には高野山は瑜祇經に依り、東寺は理趣經に依り、室生山は蘇悉地經に依つて之れを開いたと傳へられて居ります。尤も此の事には異説があるのです。此の事は山の形、土地の狀況、伽藍の布置に就いて、異つた意見が出てくるのであります

何としても、此の教旨に允つて居るといふことが、弘法大師の高野山を撰び開いた理由であるのです。則ち此の根本の考に出立して、弘法大師は高野山を御撰びになつた、而して自然の山容に相應しい諸伽藍の設備をなし、密教の興隆を計られたのであります。斯のやうにして力を注がれた高野山は、畢竟弘法大師晩年の隱棲所、入定所となつたのであります。私は弘法大師が高野山に入定所を請はれた表、其表の中に、空海聞く、山高ければ則ち雲雨物を潤す、水積れば則ち魚龍産化す、是の故に耆闍の峻嶺には、能仁の迹休まず、孤岸の奇峰には觀世の蹤相續ぐ、其由る所を尋ぬるに、地勢自ら爾り、又有り、臺嶺の五寺には禪客肩を比べ、天仙の一院には定侶袂を連ぬ、是れ則ち國の寶、民の梁なり、伏して惟みれば、我が朝歴代皇帝、心を佛法に留め玉へり、金利銀臺、櫛の如くに朝野に比比、義を談する龍象、寺毎に林を成す、法の興隆是に於てか足んぬ、但だ恨むらくは高山深嶺に禪客乏しく、幽藪窮巖に入定の賓希れなり、實に是れ禪教未だ傳はらず、住處相應せざるの致す所なり、今、禪經の説に准するに、深山平地尤も修禪に宜し云々と述べられて居るところを見ますれば、弘法大師が、如何に高野山を好まれたかといふことを知ることが出来るのであります。

私は猶ほ進んで少しく弘法大師御入定の事に就いて申し述べて見たいと思ひます。弘法大師正傳に依りますれば、舊記に云ふ、承和二年乙卯、三月二十一日寅の刻、大師結跏趺坐して大日の定印を結び奄然入定す。其の前、十日巳の刻より行法自若、侍坐の弟子共に彌勒の法號を唱ふ、其の威容平常に異ならず、瞑目して言語無きのみ。時に歳六十二、夏臘四十一。諸弟子敢て葬埋せず、儼然安置す、只禮俗に准じて七々忌を修す云々と記してありまして、弘法大師入定の事が述べられて居るのであります。明匠略傳などにも此の事に就いて述べてありますが、更に七々忌に及び、諸弟子等臨み見るに顔色衰へず、鬚髮更に生ず、剃髮を加へ、衣裳を整ひ、石垣を疊んで墓と爲し、其の上に率兜婆一本を立つ云々と入定に就いての事蹟が述べてあるのです。此の事に就いて併せ考へて見たいことは、弘法大師正傳附録に、舊記に云ふ、延喜の御宇、大師御夢想に入り、衣裳を賜ふべきの意を告ぐ、因つて檜皮色の御装束一襲を以て觀賢僧正に附し、高野廟塔に奉送す、弟子寛空、少年にして之れに従ふ云々又行狀記に云ふ、右大辨定親朝臣語つて云く、大師入定相を拜觀し、勅に依つて御服料の淨帛を以つて法衣を縫ひ、之れを着せ奉ると、又兼意閣梨記に云く、觀賢僧正大師の慈顏を拜さんと欲するに、朦霧を隔つ

るが如くにして眞容を見る無し、僧正悲涙禁じ難く、即ち懺謝して曰く、吾れ五欲の界に生ると雖も、更に犯過無し、盍んぞ靈體を見ざる乎、屢懺悔を致す、頃之にして月の朦霧を出づるが如く、物の明鏡に浮ぶが如く、容儀儼然として龜窟中に現はる、頭髮長く生じて衣服破損すと出て居ります。此の事は参考源平盛衰記などにも、事面白く記してありまして、淳祐が大師の御膝を撫で參らせたところ、移り香が其の手に残りまして取扱ふたところの石山の聖教にまで、匂ひが移つたといふことが記してあります。此の事は榮花物語にも、高野にまゐらせ給ひて、大師御入定のさまをのぞき見たてまつらせ給へば、御ぐしあをやかにて、たてまつりたる御ぞ、いさゝかちりばみけがれず、あざやかに見たり、御いろのあはひなごぞ、めづらかなるや、たゞねぶりたまへるとみゆ、あはれに彌勒の出世龍華三會のあしたにこそは、おどろかせ給はんすなめれなど、記してあります。又淳和太上皇の弔書を拜見致しますると、眞言の洪匠密教の宗師、邦家其の護持に憑り、動植其の攝念を荷ふ、豈に圖らんや嵯峨未だ迫らざるに無常遽に侵さんとは、仁舟棹を廢し、弱裘歸を失ふ、嗟呼哀いかな、禪關僻左にして凶問晚く傳はり、使者奔赴して茶毘を相助ること能はず、之れを言つて恨となす、悵悵曷んぞ已まん

舊窟を思ひ付り、悲涼料るべけんや、今、遙に單書を寄せて之れを弔す、着録の弟子入室の桑門、悽愴奈何、兼て以て旨を達せよと記されてあります。此大御心を灑がれた大師の徳澤こそは、誠に大なるものがあつたと申さなければなりません、又帝王編年記や前々太平記、三國傳記などにも、殆ど同様の記事が載せてあります。大師御入定の思想は、そのやうにして誠に不可思議な状態を示して居るのであります。さういふやうな事實、事實と申しませうよりは、大師信仰の思想の顯れに就きましては、見る人、解する人の心持に依りまして、何れにも取ることが出来やうと存じます。

偕、弘法大師は愛弟、道俗の仰慕をよそにして承和二年三月二十一日高野山奥の院に於て御入定遊ばされました。之れを悼み、之れを惜むの情に至りましたは、上下皆同じである。然しながら、醍醐天皇の大師號を賜はる勅書にもありますやうに、琴絃己に絶わては、最早如何ともすることが出来無いのであります。後年其の功業を録せられましたて遍照金剛空海と稱せられて居つた我が大阿闍梨に對して、茲に大師號下賜のことを見るに至つたのであります、其の勅書は簡單でありますが、大師の偉績を遺憾無く顯はされてありますから讀んで見ませう。琴絃己に絶わて遺音更に清し、蘭叢凋めりと

雖も餘香猶ほ播す、故の贈大僧正法印大和尚位空海は、煩惱を消疲し、驕貪を抛却す、三十七品の修行を全うし、九十六種の邪見を斷つ、既にして佛日西に没し、溟海を渡つて餘輝を仰ぎ、法水東に流れ、陵谷に通じて清浪を導く、密語を受くる者多く山林に満ち、真趣を習ふ者自ら淵叢を成す、況や太上法皇、既に其の道を味ひ其の人を追憶し玉ふをや、誠に浮天の波濤と雖も、何ぞ積石の源本を忘れん、宜しく崇飭の典を加へ、諡して弘法大師と號すへしと申されて居るのです。延喜二十一年十月二十七日即ち御入定後八十七年にして大師號を下されました此の勅書は、誠に尊く有り難く拜されるのであります。此のやうな考を以て弘法大師は永遠に生きる、事實永遠に生きて居るのであります。さうでありますから、ほんとうに大師を信する程の者は、弘法大師は今に生きて居られるものとし、高野詣をするのであります。上下貴賤の徒が、奥の院に參詣せられた事實は數ふるに遑無い程であります。思へば一七日の參籠を御心願遊ばされて、結願の其の日に振鈴の音を聞かれたといふ上皇様や、徳川家康の神像を本尊として弘法大師の御名代を勤むる高野山青巖寺の住職に、長日天下安全の御祈禱を行はしめる格法を立てた徳川幕府の政策などは、皆之れ大師が今に生きて居るといふ考から出立されたもの

である。若しもさうでなかつたならば、決して斯ふいふ風には顯はれるものでは無いと思ひます。

次に私は自然に同化せる弘法大師の面影に就いて述べて見たいと思ひます。弘法大師の詠まれた雑言に、山に入る興といふのがありますが、夫を讀んで見ますと、問ふ、師、何の意あつてか深寒に入る、深嶽崎嶇として太だ安からず、上るにもまた苦しみ下る時にも難む、山神木魅是れを廢と爲せり、君見すや、君見すや、京城の御苑の桃李の紅なるを、灼灼芬芬として顔色同じ、一たびは雨に開け、一たびは風に散じ、上に飄り下に飄つて園中に落つ、春女群り來つて一たび手に折り云々と詠まれてあります。此の雑言には山中の情景が誠に能く描かれて居りまして、箇中の天地の捨て難い趣があり／＼と見るのであります。其の事は、又、去來去來大空の師、住すること莫れ／＼乳海の子、南山の松石は看れども厭かず、南嶽の清流は憐むこと已ます云々と述べられ、天地の心に滲透して居るのです。そうして又山中に何の樂か有るといふ雑言には、山中に何の樂か有る、遂に爾ち永く歸ることを忘れたり云々と述べられ、更に澗水一坏朝に命を支へ、山霞一咽夕に神を谷ふ、懸蘿細草體を覆ふに堪へたり、荆葉杉皮是れ我が茵、意有

る天公紺幕垂れたり、龍王篤信にして白帳陳ねたり、山鳥時に來つて歌うて一たび奏す山猿軽く跳つて伎倫に絶れたり、春の華、秋の菊、笑んで我に向ふ、曉月朝風情塵を洗ふ云々と述べられて居りますが、其の情景は、山中の生活を恣にした者でなければ、到底之れを味ふことが出来なからうと思ひます、而して更に、大虛寥廓として圓光遍し寂寞無爲にして樂みなりやいなやと自問自答の境に入られて居る其の寂寞無爲の境こそ誠に樂みの極みであるのです。更に彼の有名な後夜に佛法僧鳥を聞くといふ詩の、閑林に獨坐す草堂の曉、三寶の聲一鳥に聞く、一鳥聲有り人心有り、聲心雲水俱に了々といふ神秘の境涯に至つては、何といふ朗かな心境でありませう。こういつた作物は天地の心に味到せる大師の幽遠な思想から生れ出づるのであります、高野雜筆集などにも、久しく顔色を見ず懐に惆帳す、甚だ涼し、惟るに動用安和なりや、遠く山路の絶えたるを思ひ、近く數言の話を遂げず、思詠に深しなども申されて居るのです。又彼の性靈集を拜讀して見ますと、山を詠んだ詩には前に申し上げました山に入る興、山中に何の樂か有るといふやうなもの、外、山に遊んで仙を慕ふ詩といふのがありますし、雲雨を詠んだものには、喜雨の歌、納涼房に雲雷を望むといふやうなのがあります。其他

自然に同化せる思想をうかゞふべきものには、蘿皮函の詞といふのがあります、此等の詩を讀んで見ますと、大師の偉徳を稱揚して、行は離日よりも高く、聲は彌天に冠たり、山中に坐禪すれば鳥巢ひ、獸狎るといふ其の叙述が、ほんとうに首肯されるのであります。夫は弘法大師本來の性行が斯くならしめたのでありまして、彼の小僧都を辭する表の中にも、空海弱冠より知命に及ぶまで、山藪を宅と爲し、禪黙を心と爲すなども申されまして山川幽谷を愛慕せらるゝ其の情が、眞にまざ／＼と現はれて居るのであります。さういふお心を持たれて居りますから、山門不出といふやうな淨行をも行ふことが出来るのであります、高野雜筆集を讀んで見ますと、或は空海私願契ひ有つて暫く山門を出でず云々とか、貧道限るに禪關を以てしとか、林泉未だ飽かず、迹を人間に絶つ、逸遊に限られて數々詣て、展謁することを遂げずとか、貧道閑靜を貪らんが爲に暫く此の南峯に移り住すとか、貧道禪關未だ通せずとか、空海私願期有つて暫く山門を出でずとか、愚誓期有つて年月未だ満たすとか、禪關に限られて身心己に違すといふやうな寂寞、孤棲の思想が湧き出で、來るのであらうと思はれます。私は、常々弘法大師のさういふやうな境涯、天地と一枚になるといふやうな行業、其の行蹟の千萬分の一

丈なりとも味はつて見たいものであると思ふて居るのであります。そこで毎朝、朝のお勤が済みますると、廣いコートに降り立つて四周の自然を眺めるのです。所謂未敷蓮華の形を爲した室生山の一帶、就中精進峯の邊から強い金線を放射する日光、其の日光は西方の菅間出の方に光を放げるのであります、其の情景を見ますと、俚謠の朝日さす、夕日かゞやくすがまでこんご、おせん萬貫、小せん萬貫、みつばうつぎのその下にといふ歌がおのづと頭に浮んで參るのであります。朝日さすあの菅間出の邊に、弘法大師は、六一山記にある鐘銅道具等の寶物を埋められたのではなからうか、霧を吐いては又霧を呑む山間の谷あい、浮雲卷舒の幽景と申しませうか、未敷蓮華の精進が峰には實に何も言はれぬ情趣が日毎／＼開展されるのであります、而も此の頃は河鹿が間斷なく鳴きしきりまして、幽境の雅趣を一層さびさせるのであります。又三寶鳥が背の口から曉かけて、聲朗かに鳴くのを聞きますと、あゝこつした情景に、お大師様は感催して、詩文を草せられたのではなからうか、こつた情景が、お大師様をして禪餘の筆を執らさしめたのではあるまいかと、感じさせられるのであります。克實して申しませうならば、夫れは六大無碍常瑜伽にして、四種の曼荼各離れず、三密加持速疾顯の教説を

隨所に味ふことが出来るのであらうと存せられるのであります。私は如何にも夫を尊く思ふのであります。

次に大師の御執りになられた師弟道のことについて申し述べやうと思ひます。弘法大師は其の師勤操贈僧正及び入唐求法の明師惠果和尚其の他一文、一藝の師を尊敬せられましたことは誠に私共の鑑とすべき點があつたのであります。又其の弟子を愛する情に至りましては、是れ亦頗る親切なものがあつたのであります。世に傳ふるところの十大弟子を愛された其の情義は、幾多の記録に就いてうかゞはれるのであります。此等の弟子達には御入定に先つて夫れく住すべき寺を定め、即ち眞濟僧正には高尾を、眞雅僧正には貞觀寺を、實惠僧正には東大寺を、眞然僧正には高野を、眞如親王には超證寺をといふ工合に、其の人々の法系、性格、事情等を酌んで後圖を立てられたのであります。高野雜筆集を繙いて見ますと、諸弟子に對する處置が誠に能く伺はれるのであります。お大師様は、あの己達の御業にも拘はらず、御自分の御考では、入唐留學の際に、まだ充分に究め盡さなかつた事があるといふので、弟子の康守を入唐せしめ學ばさせられたのであります。夫に就いて斯く認めてあります。空海大唐に入つて學習す

るところの秘藏の法門、其の本未だ多からず、廣く流傳すること能はず、衆縁の力に乗じて書寫し弘揚せんと思ふ、所以に弟子唐守を差して彼の境に馳せ向はしむ云々と述べられて居るのです。又或る所には、貧道大唐に遊んで習ひ得るところの眞言秘藏、其の本未だ多からざるに縁つて久しく講傳に滯る、今思はく、衆機の縁力に乗じて神通の寶藏を書寫せんと、所以に弟子の僧康守を差して彼の境に發向せしむ云々と申されて居ります。又古人面談を貴ばず、貴ぶところは道を同うするに在り、余久しく聞く、闍梨服勤精進すと、遙に以て隨喜す、甚善々々、貧道海外に涉つて習ひ得るところの金剛一乘、其本未だ多からざるに縁つて宣講することを得ず、今思はく有縁の功資に乗じて無比の寶偈を流傳せんことを、是の故に康守佛子を差して彼の方に發赴せしむ云々と出て居ります。此等の文を読んで見ますと、如何にも大唐に於ける留學に際しては、まだく學びたいと思はれたことが澤山あつたのであらうと察せられるのであります。その事は同じ高野雜筆集に、貧道大唐に涉つて習ひ得るところの眞言秘藏、其の本未だ多からず、久しく宣揚に寂すとも申されて居ります。又安行を入唐せしめることに就いて同じ雜筆集に、暮春甚だ喧なり、伏して惟みれば動止如何、空海大唐に入つて學習す

るところの眞言法藏、其本未だ多く書し得ざるに縁つて、衆の爲に傳講すること能はず星霜荏苒たり、寧ろ勞を爲すに耐えんや、所以に弟子安行を差して彼の方に發向せしむ冀くは衆縁の力を假りて、一乗の象を繋ぎ得て經疏を寫すべし、具なる目、別に載す云々と述べられて居ります。安行の差唐に就きましては更に、久しく音札を承らず、馳仰惟れ積む、季春甚だ喧なり、伏して惟みれば動止如何、空海大唐より將來するところの眞言法門、其の本未だ多く寫し得ざるに縁つて、衆の爲に講傳すること能はず、年月徒に邁く、恐らくは風燭の奄ちに及ばんことを、衆縁の功を假りて金剛一乗を流布せんとおもふ、是を以て求寂安行を差して彼の國に發行せしむ、冀くは一言の風規に乗じて秘藏の教を寫さんことをと述べられてあります。如何にも大法を欣求し、弟子の法器を大成せしめる愛情の程を察しさせられるのであります。又弘法大師が如何に弟子を愛されたかといふことは、他の方面からも之れをうかゞふことが出来るのであります。同じく高野雜筆集に出て居るのでありますが、弘法大師が入唐せられ、慈悲の大師惠果和尚に値遇し、金剛胎藏兩部の眞言秘教、曼荼羅灌頂の傳授を受けられたのでありますが、此の大法をば、日本朝中に宣揚せんと誓盟せられました。歸朝の後、將來せる經軌佛像等を

修表奉進したのでありますが、上には之れを御一覽遊ばされてから、お大師様へ送附せられました。眞言乘を傳授せよとの仰せを下されたのであります。そこで聖旨を奉戴して泉隣、實慧、泰範、智泉等に密法を教授し、次第に秘密乘教を宣傳せられたのであります。斯くしてお大師様は爲さんと欲せられたところの多くの事は之れを爲し遂げられたのであります。その晩年に及んで弘法大師はかう仰せられて居るのです。生願己に満ちて傳ふべきこと亦了る、さうであるのに國家の看顧を受くること誠に厚く、現在のやうであるならば之れ國糧を費すのみであつて誠に申譯ない、思へば斯く公食即ち國家の保護を受けて居るのも畢竟弟子育英の爲に外ならないのである。在俗の人々に取つて道を障ゆるのは妻子であるが、道家に取つての繁累は弟子である。弟子こそ眞に魔である。就ては弟子の愛を絶つて國家の庇護を辭さなければならぬ。吾れ獨り道を守るには水菜能く命を支ふことが出来る、蘿衣を着て寒暑に堪へることも出来る。斯くして密法を修し以て國家の恩德に酬へたいと、夫れく品彙を定めまして、傳ふべきことは悉く弟子に傳授せられたのであります。其の爲された工合を見ますと、誠に無限の弟子愛を掬うことが出来るのであります。此のことを天長元年十二月十五日に弘法大師

が御記しになりました師資糧食の事といふ中に、其の道を弘めんと欲は、必ず先づ其の人に飯すべし、若は道、若は俗、或は師、或は資、學道に心有らん者には並に皆須らく給すべしと仰せられたことを考ひて見ますと、大師様が此の態度に出でられたのは、よく／＼の事であらうと思はれるのです。さういふお考は智泉法師が死なれた際に達觀の文を草しまして、念へば亡せる我が法化金剛の子智泉は、俗家には我を舅と謂ひ道に入ては則ち長子なり、孝心あつて吾に事ふること今に二紀、恭敬して法を禀け兩部遺すこと無し、口密非無く、豈に唯だ嗣宗が言はざるのみならんや、怒れども移さず、誰か顔子が貳びせざることを論せん、斗藪と同和と、王宮と山巖と、影の如くに随つて離れず、股肱の如くに相従ふ、吾れ飢ゆれば汝も亦飢ぬ、吾れ樂めが汝も亦樂む、所謂孔門の回愚、釋家の慶賢、汝即ち之れに當れり云々と申されて居りますが、其の情愛の流露せるところ、誠に尊いものがあると思ひます。更に私は師弟道的情義が大師の御入定後どう顯はれたかといふことに就いて申述べたいと思ひます。此のことを知るには、實慧等が眞濟、眞然兩大徳の入唐に際して、大師の示寂を惠果和尚の墓前に報告し、同時に同法門の人々に示された書が御座いますが、夫れを讀んで見ますと、平素弘法大師が

如何に惠果和尚を尊信して居られたかといふことが解りまするし、又、弘法大師が師を愛慕する其の情が、能く弟子に徹底し、其の弟子たる者が、師の思ふところを汲んで、弟子として爲さねばならぬことを爲すといふことが察せられるのであります。私の考ふるところを卒直に申しませうならば、弘法大師は惠果和尚にお遇ひして、ほんとうに目が覺めた、そして惠果和尚に取つては、此の法器を我が入壇灌頂の弟子とするに及んで眞言密教の流傳完しと思召されたのである。そこで附囑の品々がほんとうの意味を爲してくる。然るに今、弘法大師は入定せられた。此の入定に當つて弟子共はどう處置するか、此の書を讀んで見ますと、斯う認められてあるのです。今、青龍大阿闍梨靈座の料に法服二襲を附上す、是れ孫弟の志を表するなり、又故和尚道場に奉供し、時々着用せる袈裟一具、同じく上つて、青龍曼荼の料に供養す、願はくは永々遺忘すること勿れ、亦、那邊付法の闍梨並に法侶に贈る、土毛の色目別の如し、自ら輕鮮を知る、但だ遠信を達するのみ、惟ふに也た之れを垂領せよ云々と述べてあるのです。之れを讀んで見ますと、誠に情義こまやかなるものがあるではありませんか。そうして其色目を擧げまして、大師平生愛用の法衣、法具を惠果阿闍梨の靈座に捧げ、又日常使用の道具類

綿紙、剃刀子等を同門の人々に贈られたのであります。そうして、毛物、數、多しと雖も、船載限り有り、聊か以て遠誠を表す云々と述べられまして、お大師様の遺物としては、在唐の同門衆に澤山送りたいたのであるけれども、船載の量に限りがあつて之れを載せきれない、そこで、遠方の日本から、遙に同門の人々を思ふ誠情を寄する印として、そこばくの物を贈るのであると述べられて居るのです。之れは、弘法大師の入定された翌年、即ち承和三年のことでありますが、承和四年に圓行が入唐せられるときにも、實慧等が惠果和尚の墓前に孫弟の禮を盡されたのであります。又在唐同門の人々が此等の情義に對して應酬された其の文書も残つて居りまして、夫等を讀んで見ますと、實に美はしい、同一法門を味ふ眞の修道者でなければ、斯うした美はしい道交の情は出ないであらうと思はれる點があるのであります。餘りに長くなりましたから、夫等に就いて述べることは省略致して置きます。

終に臨みまして、私は、なせ私の演題を眞言の洪匠弘法大師と附けたかといふことに就いて申述べたいと思ひます。私は初め演題を不壞の宗師空海和尚としやうかと考へたのであります。これは後宇多法皇御製の弘法大師傳に、肉身壞せずといふ句がありま

すので、不壞といふ文字を取つたのです。全く弘法大師は肉身不壞の金剛定身でゐらせられる。又藤原良房撰の大僧都空海傳には密教の宗師云々といふ句があるので。そこで私は宗師といふ文字を取つたのです。又貞觀寺座主の編まれたお大師様の傳記に贈大僧正空海和上傳記といふのがあります。そこで此等から併せ考へまして不壞の宗師空海和上と致して見たのであります。ところが、どうも之れでは落附が悪い、そこで更に考へました末に、淳和太上皇が弘法大師の御入定を悼まれた弔書の中に、眞言の洪匠密教の宗師といふ句があります。醍醐天皇の大師號を賜はる勅書に、宜しく崇飭の典を加へ、謚して弘法大師と號すべしといふ句がありますので、今日私の申述べやうと思ふことが、弘法大師而も眞言の洪匠たる大師の偉大さを顯彰することにあるのであります。私には茲に眞言の洪匠弘法大師といふ題を掲げた次第であるのです。思へば、大師は今に吾等を光被して居る。我が邦上下の人々、延いて萬邦の篤信者が大師を信仰する其の心持は、即ちありがたや高野の山の岩かげにあなたは今におはしますといふ其歌の心に現はれて居ると思ふのであります。生身の大師を信する其の力、そこに私共の確かな心のおもりが置かれるのであります。斯くして皆様方が、益々大師尊信の心を固うせらる

ゝならば、私が此の降誕會に罷出でまして、身をふるはし、聲を嗶らして大師の偉徳を
鑽仰し參らせたこともあだには終らないであらうと存じます。(大拍手)

昭和四年八月十五日印刷
昭和四年八月二十一日發行

著者 荒木良仙

發行兼
印刷者 京都市下京區三哲大宮東入一番戸
中山大忍

發行所 京都市下京區三哲大宮東入一番戸
六大新報社

325
239

終